慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ルートヴィヒ・フォイエルバッハの「現実的人間学」： マルクスはフォイエルバッハの人間学を揚棄できたか(中)
Sub Title	"Die wirkliche Anthropologie" Feuerbachs : Konnte Marx die Anthropologie Feuerbachs aufheben? (II)
Author	安田, 忠郎(Yasuda, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1976
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.16 (1976.) ,p.65- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000016-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルートヴィヒ・フォイエルバッハの「現実的人間学」

——マルクスはフォイエルバッハの人間学を揚棄できたか——

(中)

„Die wirkliche Anthropologie" Feuerbachs

——Konnte Marx die Anthropologie Feuerbachs aufheben?——

(II)

安　田　忠　郎
Tadao Yasuda

目　次

序
1.　「感性的存在」
2.　「対象的存在」と「類的存在」
3.　「人間の本質」と「宗教の本質」
(以上本紀要第 13 号〔1973〕)
4.　**フォイエルバッハの根本思想**
　(一)　**類——個と個の統一**
　(二)　**実存的思想**
　(三)　**総　括**
(本号)

4.　フォイエルバッハの根本思想

前稿（上）において，わたしは次のことを明らかにした。すなわち，フォイエルバッハがキリスト教神学とヘーゲル哲学とにおける人間疎外をあばきだしたこと，そして人間の自己疎外の揚棄を表明したこと，これである。わたしは以下で，この点を集約し深化しつつ，フォイエルバッハの思想的地平の核心を対自化することにしよう[1]。

(一)　類——個と個の統一

フォイエルバッハによると，キリスト教において[2]，ありていにいえば，神学と信仰において，人間は自己の類的本質を疎外され，その疎外態たる神に隷従させられている。「神一人」という意識関係のもとで，人間の類的本質と個的実存とが乖離している。また彼によると，ヘーゲル哲学は人間の類的本質を人間の外部に措定して，それを絶対的主体とし，その主体の一契機として人間や自然を位置づけており，そこでは実体としての普遍の主体化において，人間は絶対理性のイデーに支配され，類体と個体とに分裂させられている。ヘーゲルの絶対哲学は「人間から彼自身の本質，彼自身の活動を外化し(entäussern)，疎外する (entfremden)！」[3]。しかも，ヘーゲル哲学のもとで，類的人間は「われわれなるわれであり，われなるわれわれ」としての精神であるように，人間が類としてもつ諸能力は，全面的な「理性・意志・心情」としてではなく，たんに理性として把握され，したがって抽象的主体に疎外されている内容自体が一面的であった[4]。

そして，フォイエルバッハによれば，神・精神という超越的存在者は，人間の「抽象能力」(Abstractionsvermögen) と「想像力」(Einbildungskraft) との必然的産物であって[5]，人間の無制限的な「主観性」(Subjectivität) によって生み出されたものである[6]。いいなおせば，類と個体性との直接的統一体とされる超自然的本質は，人間の空想が「世界を，またこれとともに媒介性とか依存性とか悲しむべき必然性とかいうあらゆる想念を度外視する」[7] ところに出来したものにほかならない。神とは，「世界から隔絶して自己自身のなかにとじこもっている主観性であり，絶対的存在および本質として措定された無欲求の自己充足態であり，汝なき我である」[8]。ここから，フォイエルバッハにおいて，自己疎外の克服とは，〝主語と述語の転倒の論理〟によって，宗教・神学やそれの合理化であるヘーゲル哲学を徹底的に批判すること，つきつめていえば，人間が神へと抽象的なかたちで奪われている類的本質を奪還して〝類的存在〟となることを意味した。彼は主張している，

「宗教にとって第一のもの——神——は，……それ自

体においては，真実には，第二のものである。なぜなら，神はたんに人間の本質が人間自身にとって対象的になったものすぎないからである。そしてそれゆえに，宗教にとって第二のもの——人間——は第一のものとして認められかつ言いあらわされねばならない」[9]。

神は人間の根本幻想・根本偏見・根本制限であった[10]。だから，この意識上の幻想を破砕すること，要するに「神一人」における主述転倒を自覚し，人間がその類的本質に対して，他のものとしてではなく，まさしく自己のものとして関係することが，とりもなおさず，宗教的・哲学的疎外の揚棄であった。人間はこうした宗教改革・意識変革によって，その類的本質と個的実存とを統一し，その本来性・全体性を回復することができるのである。

フォイエルバッハはこうして，類的存在という人間の本来的な在り方を前景にうち出した。彼にとって真理は，類的存在たる人間がその本来的在り方に復帰すること，これであった。では，その「類的存在」論の具体的内実はどのようなものか。

フォイエルバッハにおいて，人間の類的本質とは，「理性と意志と愛との統一」として神的で絶対的な三位一体であり，そしてこのような普遍的本質としての類は，「人間と人間との統一」・「我 (Ich) と汝 (Du) との共同」として実存する。なるほど，人間の類的本質は一つのものである。しかし，この本質は無限であって，「その実際上の現存在 (Dasein) は，本質の富をあらわにするために互いに補足しあうところの無限な差違性 (Verschiedenartigkeit) である」[11]。物理的・知的領域，さらに道徳的領域において，人間に相互に補完しあい，その結果として，「人間は全体として総括すれば，あるべきがごとくにあり，完全な人間を表現している」[12]。つまり，各個体は質的に異なる差違的存在であり，類的本質は個性的な個人相互の連帯においてのみ存在する。類と個の関係は基本的には矛盾・対立であり，不断の緊張をはらんでおり，したがって類は個から隔離されるのでもなく，逆に個が類を直接に体現するのでもない。現実的な類的人間が実現されるのは，個と個の統一，すなわち我と汝の区別の実在性にもとづく統一，これによってのみである。

我と汝の具体的統一による類の実現——このことは視角をかえていいかえれば，人間主体にとっては世界の意識が他人の意識によって媒介されていること，ひいては私の完成のためには他人が必要であることを意味する。フォイエルバッハは述べている，

「私は他人に即してはじめて人類（人間性，Menschheit）の意識をもち，他人を通してはじめて，私が人間 (Mensch) であることを経験し感じる」[13]。

他人は私と類的世界との間の紐帯である。他人は——それが単に一人にすぎなくとも——，私にとって類の代表者である。他人がいなければ，世界は私にとって空虚であるだけではなく，無意味であり不合理でもある。人間は他人に即するとき自分自身を開示し，そのときまた世界の意味を開示する。人間は他人なしには，物理的にも精神的にも，何事もなしえない[14]。人間とは「真の人類という全体を産出するためには他の部分的存在者を必要とする一つの部分的存在者」[15] である。

このように，フォイエルバッハは個としての自己(我)と個としての他人（汝）との関係交渉を，哲学的人間論の原点においた。しかも，フォイエルバッハの人間哲学は，この思想的水位を実存哲学的に裏打ちすることによって，哲学的地平を深く遠く切り拓いてゆく。わたしは以下，その論理的脈絡に内在しながら，フォイエルバッハの実存的思想を究明することにしよう。

1) 本稿における〝引用〟にかんして，次の諸点をあらかじめお断わりしておきたい。

①引用はすべてボーリンとヨードルとの編集によるフォイエルバッハ全集からおこなう。Ludwig Feuerbach Sämtliche Werke, Neu hrsg. von W. Bolin und F. Jodl, Zweite Auflage, Stuttgart, 1960-64, 13 Bde.

②引用されるフォイエルバッハの著書・論文は，次の通りである。

1『キリスト教の本質』Das Wesen des Christenthums. 1841. (Bd. VI)

2『〝哲学の出発点〟について』Ueber den „Anfang der Philosophie". 1841. (Bd. II)

3『哲学改革のための暫定的命題』Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie. 1842. (Bd. II)

4『将来の哲学の根本命題』Grundsätze der Philosopie der Zukunft. 1843. (Bd. II)

5『宗教の本質』Das Wesen der Religion. 1845. (Bd. VII)

6『〝宗教の本質〟に対する諸補足と諸説明』Ergänzungen und Erläuterungen zum „Wesen der Religion". 1845. (Bd. VII)

7『〝唯一者とその所有〟に対する関係におけるキ

リスト教の本質』 Das Wesen des Christenthums in Beziehung auf den „Einzigen und sein Eigenthum". 1845. (Bd. VII)

8『肉体と霊魂，肉と精神との二元論に抗して』Wider den Dualismus von Leib und Seele, Fleisch und Geist. 1846. (Bd. II)

9『宗教の本質にかんする講演』Vorlesungen über das Wesen der Religion. 1851. (Bd. VIII)

10『唯心論と唯物論——とくに意志の自由に関連して』Ueber Spiritualismus und Materialismus in besonderer Beziehung auf die Willensfreiheit. 1863-66. (Bd. X)

11『遺稿箴言』Nachgelassene Aphorismen. (Bd. X)

③引用箇所は上記全集版の巻数（ローマ数字）と頁数のみで示す。

④邦訳文は文脈が許すかぎり，次に掲げる諸訳書から借用するが，訳書の頁付けは割愛する。

1. 船山信一訳『キリスト教の本質』岩波文庫(上)(下)，1965 年（改版）。
2. 松村一人・和田楽訳『将来の哲学の根本命題』岩波文庫，1967 年。
3. 篠田一人・中桐大有・田中英三編『フォイエルバッハ選集・哲学論集』法律文化社，1970 年。
4. 船山信一訳『フォイエルバッハ全集』第 11 巻第 12 巻，福村出版，1973 年。
5. 船山信一訳『唯心論と唯物論』岩波文庫，1955 年。

⑤引用文中の傍点は，適宜削除もしくは追加して，必ずしも原文隔字体の通りにはしない。

2) フォイエルバッハは『キリスト教の本質』において，キリスト教における「人間のなかの神」を解明した。そして，それを踏まえて，彼は『宗教の本質』では，現実的人間学をキリスト教以前の自然宗教にも適用し，「自然のなかの神」を掘り下げている。さらに，彼にあっては，『宗教の本質にかんする講演』のなかで，これら両著作の教説が総合統一されており，「神学は人間学および生理学（自然学，Physiologie）である」という命題がうたわれる。詳しくは，VIII, S. 23-6 を参照されたい。

3) II, S. 280. なお，訳文中の「外化」も「疎外」も，フォイエルバッハの場合，人間の意識の抽象的過程として，同一の意味内容をもっている。そのため，前稿（上）では，Entäusserung も「疎外」と訳しておいたことを，この際お断わりしておく。

4) フォイエルバッハはいっている。「普通の神学は，人間の立場を神の立場にする。思弁的神学は，これに反して，神の立場を人間の，というよりはむしろ思考者の立場にする。……普通の神学においては，だから神は自己矛盾である。というのは，神は非人間的存在，超人間的存在であるとされながら，そのすべての規定からみてほんとうは人間的存在であるから。思弁的神学または思弁的哲学においては，これに反して，神は人間との矛盾である。というのは，神は人間の——少なくとも理性の——本質であるとされながら，ほんとうは非人間的，超人間的，すなわち抽象的な存在であるから」(II, S. 252-3)。ここに，フォイエルバッハの〝新しい哲学〟は，「理性のうちでの神学の解消」であるヘーゲル思弁哲学に対して，「心情のうちでの，つまり人間の全体的な，現実的本質のうちでの解消」，要するに「神学の人間学への完全な，絶対的な，矛盾のない解消」であった (II, S. 315)。

5) VIII, S. 220.

6) VI, S. 121.

7) VI, S. 148.

8) VI, S. 132.

9) VI, S. 326.

10) VII, S. 296.

11) VI, S. 190.

12) VI, S. 188.

13) VI, S. 191.

14) VI, S. 100, 190-1.

15) VI, S. 203.

(二) 実存的思想

フォイエルバッハの人間学は，人間を〝肉体と精神をもった，自然的・感性的人間〟としてとらえていた。そこでは，物質的自然が人間存在の基礎であり，人間はそれ自身，一つの自然存在であった。「自然は人間がそれによって存立しているものであり，人間が自分のすべての行為および営為において……それに依存しているものである」[1]。「肉体は人間の実存である。……もはや感性的に存在しないものは，もはや存在しない」[2]。その上，この人間的感性は思考と感性の実在的統一としての〝普遍的感性〟であって，人間はまさしく自然的・感性的本性に貫かれていた。「精神は……感官の普遍的統一にほかならないかぎりでは，やはり同時に感性の本質である」[3]。

こうした〝自然主義＝人間主義〟において，フォイエルバッハのいう人間は，結局，世界（自然・社会）の連関のなかに制約されている〝一個の実在者〟を意味する。フォイエルバッハは強調している，「世界があるところには物質があり，物質があるところには圧迫と衝突・空間と時間・制限と必然性がある」[4] と。また，「空間と時間は……存在者の条件であり，思考の法則であるとともに存在の法則でもある」[5] と。人間は〝自然的・物質的・感性的なもの〟として，世界内に限定された一つの自然物であり，いわば「直接的にすなわち感性的に与えられ，思考から区別された客観 (Object)」としての「対象性」(Gegenständlichkeit) そのものである[6]。実在的人間は実在的世界から自己の在り方を客観的・対象的存在として定められている。つまり，個々の実在者は世界の全体的連関にとっては，一個の客観的対象物でしかない。フォイエルバッハはいっている，

「抽象的自我に対しては，肉体は客観的世界である。肉体を通して，自我は自我でなくて客観である。肉体のなかにあるということは，世界のなかにあるということを意味する」[7]。

フォイエルバッハの現実的人間は，客観世界から規定され支配されて，対象的に存在する人間であった。人間的本質は対象的な自然本質である。そして，この立地点から，フォイエルバッハの「苦悩」(Leiden) の見解が持ち出される。

「限界・時間・窮迫 (Noth) の全然ないところには，性質・エネルギー・活気・情熱 (Feuer)・愛もまた全然存在しない。窮迫に悩む (nothleidend) 存在だけが，必然的な (nothwending) 存在である。欲求のない (bedürfnisslos) 実存は余計な実存である。……苦悩し (leiden) うるものだけが実存するに値する。……苦悩のない存在は感性のない・物質のない存在にほかならない」[8]。

人間は被制約的・受動的な (leidend) 存在であり，そのようなものとして苦悩を自覚する存在であり，その苦悩をわが身に引き受けるかぎりおいて情熱的な存在である。人間は実存的苦悩を請け負うことによって，逆に制約的対象にむかって情熱的に志向する。「生命の本質は生命の発現 (Lebensäusserung) である」[9]。それというのも，人間は本源的な客観性のもとで，感性と思考の統一体として，一つの自然にして同時に意識主体，客観的存在にして同時に主観的存在であるからである。受動的作用と能動的作用の絶対的同一性として存在する人間は[10]，苦悩的にして同時に情熱的である。人間存在の対象性にもとづく苦悩と情熱とは，表裏一体の関係なのである。

〝苦悩的 (leidend)＝情熱的 (leidenschaftlich)〟——この実存的構造において，フォイエルバッハはなおまた，「依存感情」(Abhängigkeitsgefühl)，「有限感情」(Endlichkeitsgefühl)，ならびに「エゴイズム」(Egoismus) の問題をとり上げる。彼によれば，

依存感情とは，「人間は自分の実存を自分自身に負うているのではないという人間の感情または意識」[11] である。人間は他者なしには実存できない。この依存感情・依存意識はそれゆえ，人間主体の有限性の自覚と一つのものであり，そして有限感情のうちで最も苦痛なものが，「人間はいつか実際に終わる，すなわち死ぬという感情または意識」[12] である。しかも，依存性の感情はその根拠としてエゴイズムをもっている。ここにいうエゴイズムとは，「何事をなすときにも……もっぱら自分の利益 (Vortheil) を眼中にもっているような」，「俗物およびブルジョア (Bourgeois) の特徴的な標徴であるような」エゴイズム——いわゆる利己主義——ではなく，「人間の本質のなかに基礎づけられている」ところの，「それがなければ人間が全く生活することができない」ところの，つまり「人間が自分自身の価値を強調し自分自身を主張する」ところのエゴイズムを意味する[13]。依存性が自覚されるのは，まさにこうした人間的エゴイズムにおいてであり，したがって他在に対する「私」の依存感は，真実には「私自身の本質に対する」，「私自身の諸衝動・諸願望・諸関心に対する」依存感にすぎず，そうした意味で依存感情とは，依存対象によって「媒介された」ところの「間接的な・転倒された・否定的な」自己感情である[14]。要するに，依存感は「ある対象に対する欲求 (Bedürfniss) が意識または感情に現われたもの」[15] 以外のなにものでもない。人間の欲求はありていに述べれば，「対象の欠乏 (Mangel) と享受 (Genuss)」という，すなわち自己を対象に服従させると同様に対象を自己に服従させるという矛盾した二面性をもっている[16]。欲求が欠乏感において対象を必要とする (bedürfen) のは，「対象において自分を満足させるためであり，対象を享受する (geniessen) ためであり，対象を自分のために利用する (verwenden) ためである」[17]。

見られる通り，フォイエルバッハは実存的諸契機に立脚しながら，実在者間の連関を位置づけた。実在者は世界内存在として対象的・苦悩的・情熱的存在である。実在者は死の有限感情などの苦悩を自らに受けとめるとき，自らの対象存在性を直観し，そのことによって実在

的対象に対して情熱を発揮する。一個の実在者は欠乏感覚という「欲求の自己喪失」[18] から，自己が世界にとって対象であるという受身的な事実を知り，そこで対象的本質を確証するために，実在的な他者を求め，その相手をわがものにしようとする。我は対象から主体へと転成し，自己実現の欲求であるエゴイズムをとおして，他者に積極的に働きかける。かくて，フォイエルバッハのもとでは，実在的な主体に対して実在的な客観が与えられることになる。

「新しい哲学は……現実的にある存在としてのわれわれに対してあるような存在を，だから存在の客観としての存在を，……観察し考慮する」[19]。

フォイエルバッハの人間主体は，感性的な自然存在として現実的な主体であり，客観はまた，その現実的主体によって位置づけられた現実的な客観である。フォイエルバッハの場合，しかも，この現実的客観はなによりも汝である。「客観という概念は一般に対象的な自我 (das gegenständliche Ich) である汝という概念によって媒介されている」[20]。汝としての客観とは，もう一つの我・主体であって，「自由に活動する，自意意志をもつ存在」，「私に働きかける存在」[21] である。「自我性 (Ichheit) のたかぶりを打ちくだく最初のつまずきの石は，汝すなわち他の我である」[22]。それゆえ，真に現実的な客観・汝は，「私のうちの自我にではなく，私のうちの非我 (Nicht-Ich) に与えられる」[23]。つまり，私が受動的に，我から汝になりかわる場合にのみ，「私のそとにある能動性」[24] が定立される。ここでは，我は汝・他我に対する汝であり，我の存在は相手の汝によって真に位置づけられ，確実なものとなる。フォイエルバッハは晩年の労作『唯心論と唯物論』のなかで明言している，

「現実的な我であるものはただ汝が対立する我だけであり，ただそれ自身他の我に対して汝であり客観であるような我だけである」[25]。

このように，フォイエルバッハにあっては，私は私にとって自我であり，同時に他人にとって汝である。「われわれはたんに見るのみではない，われわれはまた見られている」[26]。我は他者（汝）を位置づけるとともに，他者によって位置づけられる。我と汝とは，ともに感性的な個的実在であり，ために二個の個別はお互いに孤立的・絶対的に存在するのではなく，相手があってはじめて存在可能である。個々の人間は我と汝の相互関係のなかで，他己および自己の存在を知ることができる。ここにおいて，フォイエルバッハの拓いた「人間」観の地平が，次のように要約される。

「端的ないわゆる客観は，端的ないわゆる主観が本質的にかつ不可分的に主観—客観であると同様に，客観—主観である。すなわち，我は汝—我であり，人間は世界—人または自然—人である」[27]。

現実的人間は主観即客観としての身体的主体であり，そこでは「人間は自分が存在するということを自然に負っており，自分が人間であるということを人間に負っている」[28]。だから，フォイエルバッハにとって最高の原理は，感性的我と感性的汝との統一すなわち「共同態的，社会的生活」(das gemeinschatliche, gesellschatliche Leben) そのものである[29]。そしてフォイエルバッハにおいて，この「本質上等しい諸存在の結合 (Verbindung)，統一」[30] とは，そのままに現実的な〝愛〟の統一を意味する。普遍的感性の立場は，「生活中の生活」[31] としての「愛」に焦点を定めることになる。フォイエルバッハによると，

そもそも愛は「情熱」(Leidenschaft) であって，実存のしるしである[32]。愛は「個体の確実性と真理性と実在性との根源」[33] であり，しかも個と個の統一としての類的共同の原理である。というのも，愛は客観的・主観的な存在の基準として，愛される他者の存在のみならず，愛する主体そのものの存在をも解明するからであり，愛はそのようなものとして，「類の統一性が心術 (Gesinnung) という方法で実現されたもの」[34] であるからにほかならない。「ただ愛によって他人と結ばれた生活だけが人間の概念すなわち類にふさわしい真の人間的生活である」[35]。我と汝・他我とは，相互に，相手に対する愛のなかではじめて，相手および自分の意味を発見しあいながら，新しく生まれ変わる生成の歴史を展開し，またこのようなものとして共同性を形成する。愛の共同態こそ，我と汝の対立と統一であり，「我と汝の間の対話 (Dialog)」としての「真の弁証法 (Dialektik)」[36] である。そこでは，我と汝とが自立性を保持しつつ，相互に共同性を形成する。

フォイエルバッハはかくして，愛の相互性としての現実的具体的な類的統一を，究極的に措定した。愛における我と汝の弁証法。この思想こそは，フォイエルバッハの究極的到達点であり，彼が人間救済の情熱に燃えながら，宗教的自己疎外から人間の主体性を解放して，彼岸ならぬ此岸に人類共同体を実現しようとしたところに成立したものである。人間と人間との共同態的生，愛による我と汝の共人間的関係——これがフォイエルバッハの現実的人間学の基本構造であった。

以上，本稿はフォイエルバッハ哲学の内在的分析にお

いて，その基軸的思想を描出してきた。その締めくくりをつける意味で，わたしは今しばし，フォイエルバッハの基礎原理を，現実的人間学像の全体的脈絡のなかで縁取ることにしよう。

1) VIII, S. 98.
2) II, S. 346.
3) II, S. 354.
4) VI, S. 131.
5) II, S. 306.
6) II, S. 261.
7) II, S. 213.
8) II, S. 234.
9) II, S. 341.
10) II, S. 241.
11) VII, S. 434.
12) VIII, S. 41.
13) VIII, 63-4.
14), 15), 16), 17), 18) VIII, S. 99-101.
19) II, S. 297. この邦訳文は船山信一著『人間学的唯物論の立場と体系』(未来社，1971 年) における訳文 (74-5 頁) を踏襲した。
20), 21) II, S. 296.
22) VI, S. 100.
23), 24) II, S. 296.
25) X, S. 214.
26) X, S. 301.
27) X, S. 218.
28) VI, S. 100.
29), 30) II, S. 319.
31) X, S. 144.
32) II, S. 297.
33) X, S. 144.
34) VI, S. 321.
35) VI, S. 188.
36) II, S. 319.

(三) 総　　括

フォイエルバッハによると，人間は個人としてはあくまで有限で不完全であり，苦悩にみちた存在である。そして，人間個人が「一つの個体としての類の概念」[1]，すなわち神を空想するのも，ひとえに，この客観的制限がもたらす苦悩の感情からのがれるためであり，自己の欠けたるところを補うためである。神とは，そもそも「人間がそうありたいと願うもの——現実的な本質として表象された，人間自身の本質，目標である」[2]。神は人間の本質的な欲求や願望が対象化されたものである。しかしながら，フォイエルバッハは超自然的な天上的存在者である神を，断固として拒否する。なぜなら，神への信仰はその神が人間の自己疎外の産物である以上，人間をそれの「付註」の位置におとしめるからであり，人間自身の主体性・人間性を疎外するからである。この倒錯した宗教世界にかわって，フォイエルバッハが重要視するのは，人間の現実の類的生活である。つまり，自らの類を対象的に意識する人間は，その本質を宗教的幻想で欺瞞的に充足させるのではなく，愛による人間と人間との現実的結合に向かって努力しなければならない，と彼は強調する。ここでは，神への愛にかわって，人類への愛が，「人間に対する人間の愛」が，人間の最高の実践法測である。

さて，ここに描かれた神学から人間学への解消過程で，わたしが注目しなければならないのは，フォイエルバッハが〝自己対象化〟を人間の本質的活動としてつかみ出したことであり，また愛を人間相互の〝苦悩〟において位置づけたことである。彼はいっている，

「宗教とは，人間が自分自身の本質に対して関係することである。ここに宗教の真理性と道徳的治療力とが横たわっている」[3]。

フォイエルバッハは「宗教の人間的な諸要素および諸根拠」，すなわち「人間自身の内面を対象化し人格化しようという衝動」[4] をとり出して，それの，幻想生産ならぬ，現実世界での実現を意図したのである。彼にあっては，宗教の真理として，現実的な自己対象化が積極的に評価される。ということは，彼の自然主義・人間主義の立場が，結局，人間の類的本質としての愛の力を重視すること，これを意味する。宗教とは，「神の人間における否定，解消」として，「感動，感情，心情，愛にほかならない」[5]。現実的な愛は，神への愛から演繹された派生的特殊的な愛ではなく，根源的普遍的な愛である[6]。それはしたがって，自己実現の〝欲求〟として，「個体が自分の同類の諸個体に対してもっている愛」[7] であり，そうした意味で我と汝との統一である。要するに，フォイエルバッハの愛は，個体的人間が相互にそれぞれの苦悩にもとづいて求めあう，ということであり，二人間の「共同苦悩」(Mitleiden)[8] において生み出されるものである。

「愛は欠乏，希求 (Verlangen) を前提している」[9]。

「すべての現世的現実的存在者は相互に必要としあ

いかつ補足しあう」[10]。

とすると，フォイエルバッハが力説する，人間としての人間に対する愛とは，人間主体が他人の悩みをいっしょに悩むことであり，苦悩を自らの責任として引き受けるというかたちで，「他人のために自分のものをささげるところの愛」[11] にほかならない。人間が他の人間を愛するのは，「自己を増大し，自己の威力を拡大するという利己主義」のためではなくて，他人を「善良にし幸福にし浄福にするため」であり[12]，このことによって人間は自分自身の本質を満足させ発達させ，つまりは類的存在としての自己を確証するのである。愛する者は自分の利己主義的な独立性を棄てさって，「自分が愛するものを自分の実存における不可欠なもの・本質的なものにする」[13]。そして，「人間とともにある人間，我と汝との統一は，神である」[14] から，愛は，詳密に規定すれば，肉と血とをもっている，理性と同一の愛は[15]，「実践的無神論」(der praktische Atheismus)[16] として，天上ならぬ地上で，有限なものを無限なものとして追求するところの真の宗教である。フェイエルバッハの人間学こそはこうして，宗教的感動の真理を是認するものとして，自覚した宗教，すなわち「人間神論」(Anthropotheismus)[17] であった。——『キリスト教の本質』のなかでフォイエルバッハが言表する次の事態は，以上のような思想的文脈において味得されるべきであろう。

「人類の歴史は，ある特定の時代には人類の制限として認められ，そしてそのために超克しえない絶対的制限として認められているような制限を，絶えず克服してゆくこと以外の何事のなかにも成立していない」[18]。

1) VI, S. 184.
2) II, S. 292.
3) VI, S. 238.
4) VIII, S. 227.
5) II, S. 237.
6) VI, S. 320, 326.
7) VIII, S. 64.
8) VI, S. 66.
9) VII, S. 422.
10) VII, S. 423.
11), 12) VI, S. 65.
13) VI, S. 319.
14) II, S. 318.
15) VI, S. 60, 309-10.
16) VII, S. 307.
17) II, S. 237.
18) VI, S. 184.

(未完)

〔前稿（上）における誤植・誤記の訂正〕

p. 67 左段「問題の第1頁」→「問題の第1篇」。

p. 70 左段「成るもの」→「或るもの」。

p. 71 左段「ヘーゲル哲学との体系」→「ヘーゲル哲学との対決」。

p. 71 右段註9）が付されている引用文——「人間は感官……。……の対象である」——は，全面削除のこと。

p. 75 右段「現実的肉体的は人間」→「現実的肉体的な人間」。

（なお，文脈上，訂正箇所の容易に判断可能と思われるものは，その表記を略させていただく。）